

目次

	ページ
第3回都市計画研究会	1
景観形成に関する見学会報告	2
門田博知先生追想特別講演会	3
NPO法人住環境研究会ひろしま 設立記念フォーラム	5
山陰シンポジウム	6
第1回都市計画サロン	7
四国地区における見学会と懇談会	8
会員紹介	9
ホットコーナー	10
今後の活動計画	14
編集後記	14

第3回都市計画研究会 報告

日時: 2005年10月29日(土)

会場: 広島市まちづくり市民交流プラザ

「尾道市の斜面市街地の景観特性と課題について」

小田 靖之((株)都市環境研究所)

尾道市の斜面市街地について、対岸の向島、ロープウェイの遠景、街中の近景とあらゆる角度から景観を分析評価し、課題をまとめたものである。



建物の除去による連続性の不安定化、寺院の周囲に青・赤の屋根の建物が混在することによる景観の障害、電線や電柱の存在などが課題点としてあげられた。また、これらの景観障害要因の除去や改善の提案をシミュレーションして、視覚的にわかりやすく行った。

質疑応答では

- ・景観法で電線をなくすことはできないか。

なくすことは可能。

- ・どういう目的で業務を受けたか。

世界遺産の関係の調査で。

- ・何を以て世界遺産というのか。

古い寺、港町があるという発想から。ただ、浄土寺しか文化財指定されていないため、現状では世界遺産に登録されるのは難しい。

などのやりとりがなされた。

今後、景観行政団体に指定されたことをきっかけに歴史ある街並みの維持改善が推進されることを期待したい。

「広島港色彩計画について」

藤岡 義久(中電技術コンサルタント株式会社)

広島港は雑然とした風景で近づきにくいというイメージから、港として景観としての配慮、活気や賑わいが不足している等の課題に対処するための色彩計画を行ったものである。



先進事例としては旧清水市などがあるが、中四国地方では初めてとなる先進的な取り組みである。

色彩は港全体をイメージする共通色(シンボルカラー)と個々のエリアの特性・イメージを引き出すエリアカラーをベースに詳細に計画を行った。そして実施に至るまでの流れ、実績の報告までされた。

質疑応答では

- ・どこが管理するのか。

港湾振興局が管理する。

- ・色彩計画が出てきた理由は何か。

清水、名古屋など10年経って効果が出てきたことがわかったため。

- ・強制力はあるのか。

条例化していないので強制力はない、ただ景観条例で強制力を高める可能性がある。

などのやりとりがなされた。

今後、清水や名古屋などの先進事例のように広島港も良好な景観がつけられ、賑わいのある場となることを期待したい。

### 「街並み形成の取組み」

山口 陽(国土交通省中国地方局建政部都市・住宅整備課長)

北海道江差町、街なみ環境整備事業、中国地方での活用事例についての取組みについてまとめたものである。

江戸時代からニシン漁で栄えた江差町は和風町屋や土蔵などの歴史的建築物が残っており、これらの建築物を中心とした良好な景観を維持していくため、景観形成基準を作成し実践した報告がされた。続いて街なみ環境整備事業の概要が報告され、中国地方では鹿野町での実施例が報告された。

質疑応答では

・望ましい景観とは。

地域の事情もあり、臨海部では煙突がふるさとのシンボルとなっているところもあり、一概に言えないところもある。

広島市は水辺の景観のイメージがあるが、実際には海辺へ近づけないといった問題がある。

などのやりとりがなされた。

### 「まち並みフォーラムについて」

山下 和也((株)地域計画工房)

昨年、松山巖氏を招聘して行われたまち並みフォーラムについての開催趣旨と内容についての報告である。

「まち場の思想」と題して松山氏は、まち並みは誰が作り、育ててきたのか、なぜ、町は「最も親しみやすい一つの思想」なのか、巨大開発の問題点などについて述べた点が報告されたほか、話題提供や総括的な提案・まとめについて報告された。

(文責：隅田誠)



## 景観形成に関する見学会報告

一の坂川周辺地域(山口市)

- 行政と住民との協働による景観形成 -

日時:2005年11月26日(土)13:00~16:30

コース:13:00 山口県庁舎集合

「パークロード」「一の坂川沿い」

「豎小路沿道」「菜香亭」

県庁舎 15:30 から意見交換会

参加者:16名

### 1. 地区の概要

山口市の中心部を貫流し、ゲンジボタルの名所などとして親しまれている一の坂川沿いは、護岸整備などの環境整備が進められ、市の景観条例に基づく都市景観形成地区に指定されるなど、景観形成への取組みがなされている。また、一の坂川沿いの西側はパークロード、山口ザビエル記念聖堂、亀山公園などが、東側は大内氏遺産、町家群などが残る豎小路地区などがあり、一体的な文化、景観ゾーンが形成されている。

### 2. いくつかの事例

#### 【パークロード】

山口県庁前から中心商店街に向け、ゆるやかなカーブを描いて伸びている広幅員の道路。散歩道、公園、美術館、博物館、図書館などが一体となって美しい街並みを呈している。



パークロード

#### 【一の坂川沿い】

国土美モデル地区に指定(昭和39年)されて以降、住民団体等による美化活動が進められ、行政側ではホタル護岸の整備、街なみ環境整備事業による電線類地中化、道路美装化、河川再生事業等による親水護岸整備などが進められている。



一の坂川

#### 【都市景観形成地区】

当地区は、マンション建築計画への反対を契機に、市都市景観条例(昭和63年制定)に基づく「都市景観形成地区」に指定され(平成7年、12ha)、「地区景観形成基準」に基づく建築物の指導、基準に適合する建築等に対する助成金の交付などが行われている。



一の坂川



基準に沿って建築された建物



### 【豎小路】

大内氏時代のメインストリートともいわれる豎小路は、建替え、青空駐車場化などにより、歴史的街並みが喪失しつつある。「都市景観形成地区」の指定など何らかの対策が望まれる。



豎小路(左は山口ふるさと伝承センター)

### 【町家の再生】

当地域では、大内氏時代の街並みを継承するため、改修費を助成する「町家再生モデル事業」が実施されている。景観形成と活性化に資する事業として注目される。



再生された町家(中では手作り家具販売)

### 【アートふる山口】

一の坂川・豎小路周辺地域では、毎年秋に、さまざまなまちづくり団体が結集し、地域を美術館と見立て、家の軒先や店舗に美術・工芸品などを展示する「アートふる山口」が開催され、賑わっている。

### 3. 説明・意見交換

見学会の後、旧県会議事堂(国重文)という格調高い雰囲気の中で、原田正彦氏(山口県住宅課/NPO 法人まちのよそおいネットワーク)と小山哲彦氏(小山建築設計事務所/NPO 法人山口まちづくりセンター)から説明を受け、意見交換を行った。

原田氏からは、山口市内中心部におけるまちづくり・景観形成の動きと、プランナーの立場での資源を生かしたまちづくりの構想について説明を受けた。



旧県会議事堂内部

一の坂川沿いで設計事務所を構える小山氏には、「アートふる山口」を題材に、多くの市民、学生、企業が参画し、地域の資源を生かしたまちづくり・まちおこしに取り組んでいる様子について説明して頂いた。



小山氏(左)と原田氏

### <付記>

原田氏、小山氏には、長時間、現地を案内して頂くなど大変お世話になった。その道中で、お二人が、最近建築された建物の前で、景観形成の観点から早速意見交換される姿など、それぞれのお立場で景観形成に責任を持つとされている姿勢に強い感銘を受けた。当日は、大内氏館跡、菜香亭などをはじめ、多くの歴史的資源を見学でき、山口市の文化と景観に浸れる楽しいひとときであった。その結果、意見交換の時間が不足し、市民参加について聞き漏らしたことを反省している。(文責 藤岡憲三)

## 門田博知先生追想特別講演会

### 「ひろしま」の将来を展望する

去る平成15年2月28日に亡くなられた門田博知先生を追想する特別講演会が以下の要領で開催されました。会場となった広島市まちづくり交流プラザマルチメディアスタジオには80名近い方々が集まり、講演会は非常に活況でした。本講演会は日本都市計画学会中国四国支部の主催ですが、門田先生の追想録(門田先生を偲んで 平成16年2月発行)作成時の余剰金が本講演会の開催に寄贈されたことが杉恵支部長の冒頭挨拶において報告がありました。

### 【講演会の構成】

日時:平成17年12月17日(土)14:00~17:30

場所:広島市まちづくり市民交流プラザ

マルチメディアスタジオ

基調講演 「広島都市圏に必要なことを探る」

講師 樺本 功(社)中国地方総合研究センター理事長

パネルディスカッション「"ひろしま"の将来を展望する」

コーディネーター

杉恵 頼寧(広島大学教授)

パネリスト

樺本 功(社)中国地方総合研究センター理事長

石丸 紀興(国際大学教授)

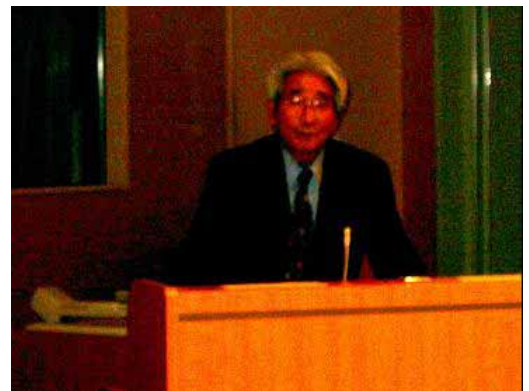
菅原 信二(国土交通省中国地方整備局企画部長)

畠山 和憲(広島県企業局次長)

池田 憲昭(広島県都市計画局都市計画担当部長)

村井 浩二(中国経済連合会常務理事)

(敬称略 順不同)



基調講演をされる樺本先生

### 1. 基調講演 「広島都市圏に必要なことを探る」

樺本先生の基調講演は、広島をよくした男三人、悪くした男五人というフレーズで始まりました。そして、門田先生は広島をよくした男三人の一人であり、門田先生が委員長、樺本先生が副委員長という委員会を数多く経験したことを冒頭に懐かしく語られました。

さて、基調講演の内容ですが、今最もホットな話題である道州制の州都の議論に絡め、樺本先生が委員長を務められた広島都市圏等中枢都市比較検討委員会(国土交通省中国地方整備局)での討議・議論をもとに「広島都市圏に必要なことを探る - 札幌・仙台・広島・福岡、4つの中枢都市

圏の比較から - 」と題して、主に広島都市圏と仙台都市圏のサービス業集積の比較・分析から「広島都市圏に必要なこと」を熱く、鋭く、判りやすく語られました。基調講演での重要な骨子を以下に列挙します。

**【基調講演骨子】**

異論なき州都は札幌、仙台、福岡であり中国地方の州都は広島？岡山？

道州制になろうとなるまいと、現在の都道府県制度のままでも広島は州都たるべく努力すべきである。

都市圏の拠点性を高める産業集積は第3次産業の中のサービス業である。

サービス業とは法律・特許事務所、教育業等の知識サービス業、保険や福祉に関連する生活関連サービス業、労働者派遣業等のその他サービス業であり、「学術科学芸術教養文化」、「医療福祉美容娯楽」に関連する業態である。広島市の現状を、法律・特許事務所が入っている専門家ビルの集積や専修学校・各種学校の学生数で見ると平成13年時点の中国地方全49市の中では確かにトップである。

しかしながら、このサービス業の集積を札幌・仙台・広島・福岡の仙台市と比較してみると明らかに違いがある。(平成8年～13年の従業者の増加数比較) 仙台市では広島市との比較の中で、教育業、労働者派遣業、情報サービス調査業等の従業者数の増加が顕著であり、仙台市は働き盛り・若者による知識技術者・研究・学習・資格取得が盛んであり、広域支援型の動脈系・活力系の都市と捉えることができる。

一方、広島市では仙台市との比較の中で、医療業や社会保険・社会福祉に関連する従業者数の増加が顕著であり、病人、老人と子供、弱者保護型、自市民用の従業が増加している。広島市は静脈系・癒し系であり基礎自治体型の都市と捉えることができる。

州都という視点では官業も民業も広域サービスを提供する必要があり、中国地方全域から広島に集まりやすくするインフラ整備が必要であるが、現状は「拒絶・広島市入り」の状態にある。

中でも、緊急の最大課題は尾道松江線の三刀屋～三次間の早急な高規格道路整備である。また広島市の中心部にアクセスする安芸府中・府中仁保道路の未整備区間や広島南道路、西広島バイパス東部線の完全完成も早期に望まれる。

「広島都市圏に必要なことを探る」の総括として、広島市の経営は自市のためだけの基礎自治体型ではなく、周辺市町村、さらには中国地方全域に高次都市機能を提供する広域支援型であるべきである。

東京の大学の子供に仕送りし東京新宿にお金が落ちるように、経済は地方から中央に流れる。地方の経済を地方に引き止めるためには、ダムを造り、中央への流出を遅くさせる必要がある。中央に流れる地域を引き止めるには広域的な視野で道州全域の高度なニーズ受け入れる都

市が必要でありそれが州都である。

予定時間一杯の講演となり、大きな拍手で基調講演は終わり、休憩を挟みパネルディスカッションに移りました。

**2. パネルディスカッション「ひろしま、の将来を展望する」(次回の支部ニュースで詳細報告)**

パネルディスカッションに関しては、冒頭でご紹介しましたように、杉恵先生をコーディネータとして6名の広島に関わりの深いパネリストにより、以下の内容で進められました。

**【パネルディスカッションの進め方】**

発言1：パネリスト紹介+進め方の説明

発言2：広島のこれからのあり方(展望)

発言3：具体的なテーマ

(1)社会基盤整備のあり方

(2)中心市街地・都心部の活性化

(3)コンパクトな、持続可能な、公共交通指向型(TOD)、環境負荷の小さい都市づくり

発言4：まとめ

パネルディスカッションにおいても、明日の広島について熱い期待と、克服すべき課題が真剣に議論されました。その内容を皆様にごできるだけ正確にお伝えするため、現在、企画・研究委員会がテープ越しの作業を実施しています。従いまして、パネルディスカッションの詳細については、次回のニュースレター(10号)でお伝えすることといたします。申し訳ありませんが、今しばらくお待ちください。

(文責 安永洋一郎)



パネルディスカッション(杉恵先生、樺本先生、石丸先生)



パネルディスカッション(菅原部長、島山次長、池田部長、村井理事)



## NPO法人住環境研究会ひろしま設立記念フォーラム

### 「広島型の安心で快適な暮らしとは!？」

日時:平成17年11月19日(土)

場所:広島市南区民文化センター

今回の企画は、標記NPO法人の設立に併せて行われたものである。このNPOは、真の生活者や住まい手本位の住まい・住環境について、市民、行政、研究者、民間企業、シンクタンクなど横断的な主体・立場から取り組んでいこうと組織されたものである。

標記第1回フォーラムは、市民・企業の方に論点を提供し、議論を喚起するために開催したものである。(最終参加計67名)以下概要を報告する。

(1)基調講演 / 「これからの広島型の住まいとは!？」 / (社)中国地方総合研究センター 宮本 茂

住まい、住環境、まちづくり、広島の特長等について話題提供を行った。持ち家、特に分譲マンションの急増、コミュニティ意識の希薄化、都市構造の問題などを指摘した上で、ストックを活用したまちづくりの必要性、公共的な意識の醸成を提案した。

(2)基調講演 / 「住まいの快適をデータで確認しよう」 / 広島工業大学工学部教授 清田 誠良

住まい、住環境、まちづくりに対して話題提供を行った。

住まいでは、広島の気候風土、ライフスタイルなど、住環境では、シックハウス対策、断熱性能の評価、外壁劣化診断調査などを、まちづくりでは、少子・高齢への対策などを提案した。



(3)パネルディスカッション / 「それぞれの立場から広島型の快適な住まいを語る」

パネリスト / 清田誠良(広島工大) 平田欣也(アトリエ平田) 藤本真弓(主婦・医師) 松田智仁(広島建築士会) コーディネーター / 大森富士子(バリバープロダクツ)

大森: 持ち家率の増加、分譲マンションの急増が住み替えや建替え問題、郊外住宅の疲弊化を招き、また人口横ばいの中での住宅数の増加は若者や高齢者の単独世帯を増加させているといった現状である。

藤本: 自邸の建築を考えるに当たって、将来は子どもが巣立った後も快適に住めるように、そして終のすみかとなるようバリアフリーにしておくことも考えた。

大森: コミュニケーションとプライバシー、いずれもバランスが必要であることは重要である。それが崩れると、家族関係にも大きく影響する。

藤本: 「個々人」に重きを置いてそれが集まって家族を作るオーストラリアと、「家族」を前面に出してその中に個人

が存在するという点で、過去日本は別で調査して体験したカンボジアに近いのだと思う。

平田: 建築主の要望はとても多様化している。時間をかけてじっくり話し合うことが、建築主のニーズを引き出す最大のポイントだと思う。

大森: 戸建て、集合住宅両面において、どういった違い、特性を持った広島らしい住まいや暮らし方が考えられるのか。

清田: 都市圏と農山漁村部とを持つ広島では、居住の違いにより、考慮しなければならない内容も大きく違うことを知っておく必要がある。

大森: 建築家として家をつくっていく場合にも、コミュニケーションがとりやすい形という配慮はあるのか?

平田: 建築家は、建築と街とのかかわり方にもっと努力して行かなければならないと思っている。広島の状況と、問題点を解決しながら、転勤族の方が近隣の方々とコミュニティをつくっていただけるような賃貸集合住宅を考えたい。

大森: これからの住まいづくりにおいては、居住者はまち並みとの調和や景観とのバランスを無視することはできない、つまりはまちづくりといかに接点を上手に持てるかが、快適な暮らしに直結するということであろう。

清田: 広島においては、未来に対して都市の遺伝子を残せるようなまちづくりが必要であると考えられる。特に、コミュニケーションを喪失した集団の中で、コミュニケーション形成を中心においたコーポラティブなまちづくりが要求されているようだ。

松田: 広島らしい特徴的な住まい方を3点提案したい。1番目に、水辺にすむこと。2番目に、都心居住でも、瀬戸内海の気候、風土と光を享受すること。3番目には、路面電車を含めた軌道系交通機関の沿線に居住し、自動車依存のライフスタイルから転換し、地球環境にやさしい住まい方を増やしていくこと。また、まちづくりを進める観点からは、1つ目は、人口減少・少子化高齢化、団塊世代の定年などを背景として、街の遺伝子を未来に伝えていくことが重要。2つ目は、他人と一緒に棲むこと、コミュニティの形成であり、災害時の相互協力関係、地域清掃、公共空間の利活用による地域おこしなど。3つ目は、緑化と維持管理である。

大森: 幼い子の安全を守るためのまちづくりの検討も始まっている。こうした時代背景をしっかりと踏まえ、そこに広島らしさを加えた安心で快適な住まいや住環境を実現するために、我々NPOは様々な観点から活動を行っていきたく願っている。

(4)まとめ

現状では、論点を情報提供したに過ぎない状況である。今後、広島型の住まい・住環境づくりに向けて情報発信を続けていきたい。そして単に提案だけではなく、実現や検証などの事業にも取り組んでいきたいと考えている。

(文責 宮本茂)

## 山陰シンポジウム

「文明の原点 人と風土とアメニティ」

日時:2005年11月26日、14:00~18:00

場所:鳥取県米子市「本の学校」

記念講演:オギュスタン・ベルク博士(仏国立社会科学高等  
研究院教授、国際日本文化研究センター研究員)

「日本の住まいの持続可能性:理想と現実の間」

基調報告:熊谷昌彦(国立米子工業高等専門学校)

「山陰の住まいの原風景と現代の街並み」

テーマ別報告:

小泉凡(鳥根県立女子短期大学助教授)

「1890年の松江と百年後の松江 ハーンはなぜ松江を好  
きになったか」、

木谷清人(鳥取民藝美術館常務理事)

「手仕事の復権 鳥取民藝」

足立茂美(「本の学校」生涯読書をすすめる会)

「赤ちゃんの笑顔が地域を変える一ブックスタートがもたら  
すもの」

和田嘉宥(国立米子工業高等専門学校教授)

「山陰・まち並み文化の多様性と普遍性」

コーディネータ:錦織文良(AMR副会長)

主催:AMR アメニティ・ミーティング・ルーム

共催:山陰シンポジウムを開く会、呼びかけ人代表道上正規  
(とっとり政策総合研究センター理事長)、藤岡大拙  
(NPO 出雲学研究所理事長)、熊谷昌彦(国立米子工業  
高等専門学校教授)

後援:鳥取県、島根県、出雲市、松江市、安来市、米子市、大  
山町、鳥取大学、島根大学、鳥取環境大学、島根女子  
短期大学、国立米子工業高等専門学校、日本都市計画  
学会中国四国支部、日本建築学会中国支部等多数

事務局:「本の学校」郁文塾

オギュスタンベルク氏の記念講演の内容について以下  
報告を行う。

「住む」という言葉には、同じ音であるが異なった意味  
をもつ漢字があてはまる。つまり、「棲む」「澄む」がある。  
言葉そのものに、動物が隠れ家に隠れて棲んでいる状況や  
清らかな意味を示す澄む等多様な意味が隠されている。そ  
こでは「住む」という世界を、別の漢字に見立てることで、  
さらに奥行きのある世界を見せるのである。

このような「見立て」は、日本において古来からあるも  
のである。例えば、清少納言の枕草子「雪のいと高う降り  
たるを」の段で、中宮定子の「少納言よ、香炉峰の雪いか  
ならん」の言葉に、清少納言が、白楽天の詩をふまえ、さ  
っと御簾を上げて外の雪景色をご覧に入れ、人々を驚かせ  
たという話がある。

この事例に見られるように、文化は我々の感覚の生理学  
的な能力とは独立に、意識と事物との間にある種のフィル  
ターをいくつか介在させ、それが情報を通したり通さなか  
ったりするのである。我々が風景を知覚するのも、絵画や  
詩歌などで教育され、仕込まれた視線である。そのような

教育がなければ、我々が知覚するのは環境にすぎない。  
オギュスタンベルク氏(本の学校於)

和辻哲郎が主張するように、「環境」は近代科学の対象で  
あるのに対し、「風土」は人間の主体性を前提とするもので  
ある。風土性とは、ただ外に広がる客体の特徴ではなくて、  
人間存在の契機なのである。

日本語で、殺風景という言葉がある。現実はこの殺風景  
の状況が世界のあちらこちらに起こっている。ここで、住  
まいの非持続性の3つの面について考察する。一つは、生  
態学上の非連続性である。それは、我々の生活様式が必要  
とする資源等の再生産を計算し、その額を地面の面積に換  
算するという生態学的足跡(ecological footprint)で示す  
ことができる。この計算では、2000年頃で、一人当たりの  
面積(いわゆる足跡)は2.85haという数値がでる。それ  
によれば、人類が持続的に生きるためには、地球1.3個分  
の地球を必要としている。もし、全人類がアメリカのカリ  
フォルニアの住民と同じ生活様式をしていれば、持続的に  
生きるためには、我々はおよそ12個の地球を必要とする  
のである。この傾向は明らかに非連続なのに、中国などの  
経済成長のため、その普及のペースがあがっている。

二つ目は、倫理学上の正当化の不可能性である。非連続  
的な生活様式は、他の人間の生活様式を圧迫している。次  
世代だけでなく、現世代の先進国以外の人類の自然資本の  
多くをとっているのである。これは明らかに、倫理的に  
みて誤りであろう。

三つ目は、美学上の耐え難さである。一言で言えば、風  
景の破壊である。殺風景の氾濫である。つまり、我々の生  
活様式は風景を殺している。

私達の非連続な生活様式は、人類が求めてきた真・善・  
美という存在の基本的な価値に反しているのである。自然  
法則に背くから真ではない。倫理に背くから善ではない。  
風景を殺すから美ではない。現世界の趨勢はそういうもの  
なのだ。我々の世界は、非連続的な世界をどんどん築きつ  
つある。

これらの問題  
は確かに生態学  
上の問題ではあ  
るが、我々の生  
活様式を通じて、  
我々の存在その  
ものを問うてい  
るのである。



私の風土論の基本的な概念の一つは、世界の述語性であ  
る。この場合、<述語>とは<とらえ方>と同義語になる。  
世界とは、地球のあるとらえ方なのである。<土(S)を  
ある風(P)にとらえること>が風土性である。我々は現  
世界を相対化し、その絶対的に必要な基盤である地球を再  
発見しなければならない状況におかれているのである。

(文責:熊谷昌彦)



## 17年度・第1回都市計画サロン

ホットコーナーでおなじみの福馬編集員に、近年訪れた海外の都市のたくさんの写真とともに、各地の文化や景観について、現地でのエピソードを交えながら紹介していただきました。



**タイトル:**世界の都市とその景観から

**話題提供者:**福馬晶子(広島市)

**日時:**平成17年12月22日

**場所:**コンフォートホテル

**参加者数:**15名

### (1)世界遺産の宝庫ペルー

ペルーはインカ帝国にゆかりのある都市を紹介していただいた。(詳しくはNL4号をご覧ください)

クスコ

インカ帝国の首都で、コロニアル様式の建築物、斜面市街地などが特徴。



ナスカ

ペルー南海岸地方の盆地に位置する。乾燥した高原の地表面に描かれた『ナスカの地上絵』は世界遺産。



マチュピチュ

インカ帝国が逃げて作っ

たといわれる天空都市。最も行ってみたい人が多い世界遺産と言われている。



チチカカ湖

標高4000mに浮かぶ湖。葦でできた島では、葦でできた家に住み、葦舟に乗って生活をしている。

太陽の島(ポリビア)

インカ帝国発祥の地といわれるチチカカ湖に浮かぶ島。



### (2)韓国清溪川(チョンゲチョン)の挑戦

ソウル市中心部の高架道路を撤去して、その下に河川を再生するという、総額360億円のビッグプロジェクトについて、紹介していただきました。

### 事業の目的・背景

経済優先、車優先からうるおいのある都市づくりへと方向転換し、新たなソウルブランドを確立しようと、市長が清溪川(チョンゲチョン)の復元事業を公約に掲げて当選。

1940年: 日本統治時代に清溪川の一部区間を地下化
58-61年: 2.3km区間を地下化
68-78年: 高架道路を建設
94-99年: 一部区間の補修、補強工事を実施(総事業費100億円)
2002年: 清溪川の復元事業を公約に掲げた市長が当選
03-05年: 清溪川復元工事の実施、05年9月竣工

### 交通対策

清溪川通りを利用する市民の交通手段は、着工前(03年1月:マイカー58.9%、バス20.5%、地下鉄12.5%)、着工後(03年8月:地下鉄47.5%、マイカー26.9%、バス19.0%)と、マイカーから地下鉄へと大きく転換している。これはマイカー曜日規制や地下鉄乗車券の配布などのモーダルシフト政策があわせて実施されたことが影響している。

バスは、無料シャトルバスを出しているが苦戦している。これは、工事中であることも影響していると考えられる。

### 事業の効果

100年の計の事業であり、効果を計るには早計であるが、ソウル市民全体では、事業に賛成が、着工前(03年1月)71.8%から、着工後(03年8月)79.1%、反対が20.7%から7.3%と総じて良い評価を得ている。確かに、写真で見ると、川辺に人があふれ、街が明るくなったようだ。

### 課題・感想



イメージ鳥瞰図

数年前に100億円かけて補修したものを、今度は360億円かけて撤去し再生するという決断(パラダイムシフト)は大いに学ぶべき点がある。清溪川の護岸



のデザインなど、もっと工夫の余地もありそうだが、隣国なので実際に見に行ってみてみたいものである。新たなソウル文化の発信基地となっていれば大成功である。

なお、写真は6都市分も用意していただいたが、サロン終了後に忘年会が控えているというシビアな状況の中、2都市のみの紹介で時間切れとなってしまいました。

続きは乞うご期待。

(文責:佐伯達郎)



## 四国地区における見学会と懇談会

(地域活動助成事業)

テーマ：美しく魅力的なまちづくりを目指して  
- 景観の視点から -

### プログラム

#### 現場見学

- ・日時：平成18年1月16日(月)13:30～14:30
- ・場所：屋島山上



屋島から高松市街を見下ろす



廃屋化している屋島の店舗

高松市の観光名所である屋島の現状について高松市の國方氏より説明があった。屋島は、1972年をピークに観光客は減少の一途をたどり、現在では年間55万人とピーク時の4分の1となっている。そのため、屋島山頂にあるホテルや土産店の店じまいが相次ぎ、現在では、11ある建物のうち8つが廃屋と化している。それらの有効利用策の検討について説明があった。

### 懇談会

- ・日時：平成18年1月16日(月)14:30～17:00
- ・場所：サンポート高松 55会議室



懇談会の状況

### 話題提供の概要

#### 景観計画・景観行政に関する話題提供

(岡山大学大学院環境学研究科 阿部宏史氏)

阿部先生より、岡山市と倉敷市における景観行政の取り組み状況について、講演頂いた。

- ・岡山市の都心部及び郊外部の抱える課題について説明
- ・岡山市都市計画マスタープラン、岡山市景観基本計画について紹介
- ・倉敷市の変遷と倉敷美観地区周辺における町並み保存の経緯について紹介
- ・中心市街地活性化と景観形成の課題について紹介  
岡山市・倉敷市の事例を踏まえ、景観法の基本理念をまちづくりにどう生かしていくべきか、下記の4つの課題を示された
- ・社会の共有財産(=社会的共通資本)としての「景観の認識」
- ・都市マスタープランの中での「景観」の明確な位置づけと短期、中期、長期の具体的な目標設定
- ・土地利用計画、市街地整備と計画形成の一体化
- ・多様な主体の参加と協働の推進体制づくり

#### 景観法活用に関する国の動向

(国土交通省四国地方整備局建政部都市調整官 西野 仁氏)

- ・景観法の概要について、全国的な動きとともに紹介
- ・四国における景観法活用検討および「えひめ景観計画策定ガイドライン」について紹介

(国土交通省四国地方整備局建政部都市・住宅整備課長 鈴木 武彦氏)

- ・景観法の制度活用支援調査(高知県梼原町・愛媛県大洲市の事例)について紹介

参加者より、行政における景観技術者が少なく、育てていくべきだとの声があり、整備局側でもその問題を認識しており、色彩・デザイン等の研修を始めているとのことであった。

#### 国土形成計画について

(国土交通省四国地方整備局建政部長 深澤 宏典氏)

人口減少下の成熟社会にふさわしい国土の質的向上を図る国土計画へ転換を図ることが必要となり、国土総合開発法を抜本的に改正し、国土形成計画法として平成17年7月29日に公布された。国土形成計画法の公布を受けて、策定される国土形成計画の枠組み、策定スケジュール、国土政策上の重要課題について説明があった。

#### まちづくり三法について

(国土交通省四国地方整備局建政部都市調整官 西野 仁氏)

平成10年に「まちづくり三法」が制定されてから7年が経過したが、目に見える効果が挙がっているところが少なく、より効果を高めるための「まちづくり三法」の見直しの動きに関して説明が行われた。

(文責：綾 貴穂)



## 会員紹介

### 今田寛典(いまだ ひろふみ)

呉大学社会情報学部・大学院社会  
情報研究科教授 / 学生部長

1948年広島県生まれ / 広島大学工学部  
土木工学科卒業 / 広島大学大学院工学  
研究科修士課程修了 / 広島県土木建築  
部技術吏員 / 広島大学助手 / 呉大学社  
会情報学部助教授を経て、1999年4月より現職 / 日本都市計  
画学会中国四国支部監査、日本福祉のまちづくり学会第9回  
全国大会実行委員長、日本社会情報学会理事(2006年4月よ  
り) 呉市建築審査会副会長



### 現在の関心事

呉大学は1995年創立の新しい大学です。私が所属する  
社会情報学部は何を学ぶ学部なのか?とよく質問されます。  
簡単に言えば、大きく変化している社会で生じる問題を分  
析、解決しようとする学部です。経済学、環境科学、情報  
科学、社会学、法学等、旧来の学部のグローバル化とでも  
言えましょうか。本当は奥の深い学問分野ですが。

2005年日本の人口が減少に転じました。このことはこれ  
までの社会の仕組みを大きく変えることになると考えます。  
発想が土木的になってしまいましたが、工学、社会学の視点  
から社会問題を考えていきたいと思っています。

しかしながら、現在の最大の関心事は、学生部長の立場  
上大学運営、学生募集です。研究に時間を割くことが困難  
であり、研究活動は現在休眠中です。

### 研究活動

現在の研究課題は、  
(1)中山間地における  
高齢者福祉政策への情  
報通信ネットワークシ  
ステム導入、(2)中国に  
おける都市環境問題の  
理解と考察、(3)景観基本計画とまちづくり、(4)島嶼部・傾  
斜地域におけるユニバーサルデザイン等である。



### 呉市の状況

呉市は意外と知られていません。戦前は広島市よりも人  
口が多かった。路面電車が走っていた。観光資源が多い。

呉市は中核都市に指定されていますが、人口の減少が続  
いています。昨年、呉市は周辺6町と広域合併を行い、人  
口は増加しました。しかし、合併した6町の内5町が島嶼  
部です。元々呉市は、急傾斜地を開発してきた都市で、合  
併によりさらに急峻な地形の島嶼部も加わりました。この  
結果、都市部と周辺部における都市サービスの格差が懸念  
されます。格差の解消、高齢者はもちろん若い世代さら  
には観光客にとっても魅力があり、活力のあるまちづくりが  
求められています。

今年、8月27、28の両日呉市において日本福祉のまちづ  
くり学会全国大会が開催されます。会員の皆さんの参加を  
期待しています。

## 会員紹介

### 島 博司(しま ひろし)

(有)集環境計画代表取締役

1951年徳島県生 / 1979年筑波大学  
大学院修士課程修了 / 1979年(株)住  
宅・都市問題研究所研究員 / 1985年(株)住  
宅・都市問題研究所取締役 / 1992年  
徳島にUターンし、まちづくりコンサル  
タント会社(有)集環境計画を設立  
 / 1999年NPO法人新町川を守る会理事 / 2000年N  
PO法人徳島共生塾一步会理事 / 2001年とくしまNPO  
連絡会議事務局 / 2003年NPO法人市民未来共社副理  
事長 / 2004年徳島市市民活力開発センター(NPO支援セ  
ンター)マネージャー / 番外活動:国土交通省地方振興ア  
ドバイザー、阿南工業高等専門学校非常勤講師、徳島県屋  
外広告物審議会委員など



### 意義ある仕事を求めて

地方都市(徳島市)に1991年、Uターン、主にマスタ  
ープラン(総合計画、都市計画、地区計画)を手がけたけ  
れど、地方自治体の意思決定過程や計画推進能力の違い、  
大都市圏での都市・地域の問題の違いも実感できた。この  
4年間は、地域づくりの仕組みづくり、地域支援のための  
条例やまちづくり条例などを一つの町で続けてきた。一方  
で、市町村合併の町づくり計画の作成支援も行い、合併破  
綻にいたる過程もよく分かった。コンサルタントが社会に  
意義ある仕事の難しさも体験できたが、同時に、仕事だけ  
では町も地域もよくなることを確かめる4年間でもあ  
った。

### 社会貢献活動ならもっと意義があるかも。

阪神淡路大震災後の幾つかの街を歩いた。被災調査も短  
期間ながら手伝った。既に市民活動促進法案作成にいたる  
過程も報告書で知っていた。変わるかもしれない。非営利  
組織の成長、活動領域の進展が地域を変えるかも知れない  
と思った。多くの市民活動団体と接触、幾つか法人の役員  
になったり実行委員会の事務局を引き受けたりしているう  
ちに、NPO法人化を手伝うようになり、自ら支援機能をも  
った「とくしまNPO連絡会議」を設立。まちづくりから福祉  
の領域まで幅広く共感できる若者も育てたいと欲張  
ってもみた。再生不能の中心商店街にある大正時代の町屋  
を再生し、カフェも始めた。人口減少、速度の速い高齢社  
会では、ますます拡大するニーズと社会貢献団体の能力と  
の違いもでている。私が長生きするにも、二足のわらじは  
必要かも。



## ホットコーナー

### アメリカ大学キャンパス訪問記

…企画・研究委員 塚本俊明

10月31日から11月7日まで、日本建築学会キャンパス計画小委員会の米国大学調査に参加し、アメリカの大学を視察しました。公式訪問ではコロンビア大学、ペンシルバニア大学、イエール大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学(MIT)という東海岸の大学を訪問。そのついでに、サンフランシスコ周辺の大学も見学しました。アメリカの代表的なキャンパスの様子を紹介します。

いきなり番外編ですが、企画・研究委員会の景観研究会に参加して1日遅れでニューヨークに昼過ぎに到着。早速、ニューヨーク市内を散策しました。有名な「グランド・ゼロ」。今回はWTCに上っただけに感慨無量(写真1)。



写真1 グランド・ゼロ

そのあと、滞在中視察団のお世話いただいた三菱地所の駐在員の案内でロックフェラーセンターの最も高いビルの展望台へ。すばらしい摩天楼の夕焼けです(写真2)。



写真2 マンハッタンの夕焼け

#### (1)コロンビア大学

コロンビア大学は、セントラルパークの北西、西ハーレム地区にあります。学生約24,000人、教職員約9,000人。既存のキャンパスは緑豊かな広場を中心に歴史と伝統を感じさせる建物が建ち並び、マンハッタンにあるとは思えない空間です。中央の広場では、学生たちが思い思いに勉強や歓談する姿が見られます。

施設拡充の要求が高まったため、現在、北側約1kmの地区で新キャンパスの整備(拡張)が計画されています。



写真3 Low Memorial Library



写真4 キャンパス風景

#### (2)ペンシルバニア大学

ペンシルバニア大学は、アメリカ合衆国独立の地フィラデルフィアの都心西側に位置する歴史ある大学。州の名前を冠していますが私立大学です。1740年に米国5番目の高等教育機関として設立され、年代を追ってキャンパスを拡大してきました。近年、歴史的な建物のあるゾーンがリニューアルされ、美しく快適な歩行者空間として生まれ変わっています。ちょっとはずれには何気なくルイス・カーン設計の研究棟も。ペンシルバニア大学では、フィラデルフィア市との密接な連携のもとにキャンパスの整備・拡充・再整備などが推進されています。

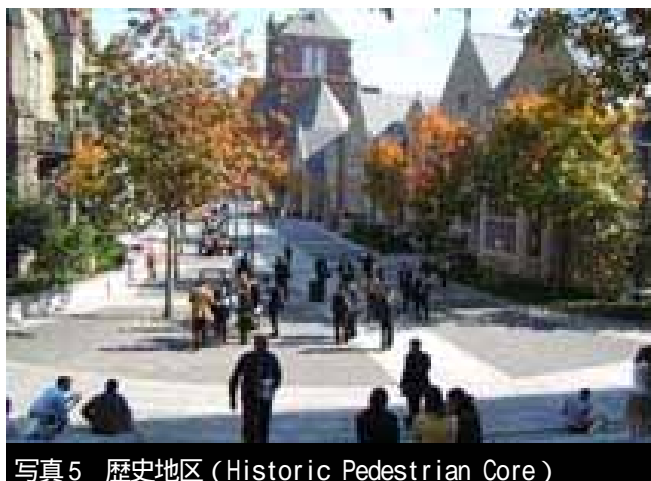


写真5 歴史地区(Historic Pedestrian Core)



研究棟を設計したシーザー・ペリの事務所(本社)で大学担当者・市役所の都市計画担当者にヒアリングしましたが、途中、シーザー・ペリ本人が現れてびっくり!

#### (4)ハーバード大学(ケンブリッジ市)

ハーバード大学は、ボストンの北側、ケンブリッジ市にあるアメリカでも最も長い伝統を誇る大学のひとつです。レンガ造りの建物が主体のカレッジは、広々とした中庭の木々がみごとな紅葉を見せ、魅力的な空間を創り出しています。大学の建物はまちの中に埋め込まれ、周辺と一体的な市街地を形成しています。ケンブリッジ市の建築規制等により、現在でも周辺の環境と調和した建築物のデザイン



写真9 キャンパスの建物群



写真10 Harvard Yard の美しい紅葉



写真11 Allston 地区の新キャンパス



写真6 The Green (緑豊かな中庭)

#### (3)イェール大学(ニューヘブロン市)

イェール大学は、ニューヨークとボストン市の中間に位置する人口約12万人の港町、ニューヘブロン市にあります。市街地内に埋め込まれたキャンパスは、それぞれの街区ごとにカレッジを構成し、学生はカレッジ内の寄宿舍で寝起きし、学生生活を送ります。イギリスのカレッジの雰囲気の色濃く残す、緑豊かで重厚な雰囲気のキャンパスは、歴史と伝統を十分に感じさせます。この雰囲気を守るため、施設の増設にあたっては地下に設備や収蔵庫を設けるなど、建築的にも様々な工夫を行っています。

イェール大学も長期計画に基づいて、市との緊密な連携のもとにキャンパスの拡張を進めています。



写真7 緑豊かなカレッジの中庭



写真8 重厚なレンガ造りの校舎

や配置が行われています。まなほ、キャンパス機能の拡張が困難となったため、チャールズ川対岸のAllston地区(ボストン市域)で新キャンパスの建設が進められています。

キャンパスにはコルビジェの建物がさりげなく建っていました。また、建築学科の製図室のすばらしさは必見です!

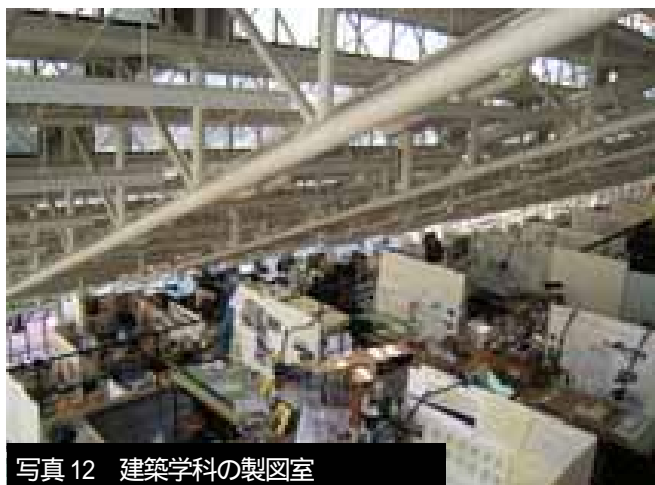


写真12 建築学科の製図室

ところで、ボストンは私の最も好きな街のひとつ。再び訪れるのを楽しみにしていました。チャールズ川の対岸からの眺めは最高。そして今回はボストンコモンやビーコンヒルの歴史的な街並み、ウォーターフロント再開発で有名なクインシーマーケットなどの散策を満喫しました。



写真15 チャールズ川とボストンの街並み

### (5) マサチューセッツ工科大学(MIT)

MITも、ハーバードと同じケンブリッジ市にあります。ふたつの大学は学部構成やキャンパスの空間も大きく異なっており、MITは近代的なキャンパスが形成されていました。中には、ちょっと理解に苦しむようなアバンギャルドな建物も……。現在も新しい研究施設等の建設が進められており、活力にあふれている感じは受けました。



写真13 MITのシンボル Maclaurin Buildings



写真16 Beacon Hill (歴史的地区)

### (6) カリフォルニア州立大学バークレー校

アメリカの大学で是非訪れてみたかったのがバークレー。大学とまちが一体となった大学町の代表的な事例です。斜面地に形成されたキャンパスからは、サンフランシスコ湾の向こうにサンフランシスコの街やゴールデンゲートブリッジが望めます。キャンパスとまちの接点あたりには共用施設(レストラン、売店、サービス施設等)が立地し、



写真14 Stata Center (情報系の研究棟)



写真17 Sather Tower からの眺め



多くの学生が集うキャンパスらしい雰囲気があふれていました。パークレーでは、学生の案内するキャンパスツアーも体験。



写真18 Sprowl Plaza の賑わい



写真19 大学前の学生街



写真20 学生によるキャンパスツアー

## (7)スタンフォード大学

スタンフォード大学は、サンフランシスコ湾の最奥部、シリコンバレーで有名なサンノゼ市近郊のまち、パロアルトにあります。1891年に開学した大学キャンパスは、セントラルパークの設計で有名なオルムステッドが担当。カリフォルニアの太陽にマッチする広々とした美しいキャンパスです。低層で統一されたデザインのキャンパスは、惚れ惚れするほど美しい空間でした。

このような環境の中で勉強する学生がうらやましく感じました。(もっとも、アメリカの名門私立大学の学費は年間300万円はかかるとか。とても気軽に入学できる状況ではない!)

キャンパス内にある美術館はロダンの彫刻で有名。しかも、常設展示は無料で見学できます。大学の存在が、素晴らしいまちの魅力を創り出しているようです。



写真21 正面から見たキャンパス



写真22 Hoover Tower から眺めるキャンパス

## 終わりに

今回訪れた大学は、いずれも名門と言われる大学で、それぞれに素晴らしいキャンパスの環境を整えていました。同時に、都市との関わりも強く、都市と一体となりながら大学の運営や施設の整備を進めていました。特に、公式訪問で訪れた東海岸の大学が、いずれも大学内にキャンパス計画、整備のマネジメント組織を設け、長期的な視野に立って施設整備を推進していること、さらにそれぞれの立地する都市との密接な連携のもとに、都市と大学の一体的な発展を図っていることが強く印象に残りました。

## 今後の活動計画

### 平成17年度都市計画研究会 景観フォーラム

日時：2006年1月29日(日) 13:30~16:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ6階

マルチメディアスタジオ

主催：(社)日本都市計画学会中国四国支部

基調講演

西村幸夫先生(東京大学大学院教授)

講演テーマ

「景観法の意義とこれから」

景観まちづくりがなぜ必要とされているか(景観法が制定された背景)、まちづくりにどのように活用できるか、中国・四国地方における景観まちづくり...

ディスカッション

話題提供者・参加者 コメンテーター(西村幸夫先生)

### (社)日本都市計画学会中国四国支部 第4回研究発表会・

#### 2006年度(第4回)研究発表会

日時：2006年5月27日(土)

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ(予定)

発表内容：市計画に関する研究、報告、調査、紹介、論説等

応募資格：表者は学会員であること。連名者は非学会員でもよい。ただし、委員会が認めた場合は、発表者が非学会員でもよい。

問合せ先：〒737-8506 広島県呉市阿賀南2-2-11

呉工業高等専門学校環境都市工学科 山岡俊一

電話&FAX 0823-73-8955

E-mail アドレス yamaoka@kure-nct.ac.jp

申込み方法、原稿執筆要領、当日のプログラム、発表方法、開催場所等の詳細については別途お知らせします。

### <催し紹介>

#### ひろしままちづくり井戸端トーク2006

日時：2006年2月18日(土) 13:00~17:50

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ6階

マルチメディアスタジオ

主催：(社)建設コンサルタンツ協会中国支部、(社)

広島県建築士会広島支部、(財)広島市ひと・ま

ちネットワークまちづくり市民交流プラザ

<一部> 二葉の里・花のプロムナード(二葉の里づくり隊・シイどんくらぶ)

文字からひろがるふれあい夢事業 - “ほんごう子ども図書館”からの発信 -

くまの高原からオアシスをつくろう(くまの高原ファーム)

魅力と誇りにみちた町づくり(石州街道・出口地区まちづくり協議会)

<二部> “おやし活性化委員会”の汗と涙と男と女

輛のまちづくり(輛まちづくり工房)

住む人が・使う人が創るまち(うぶすな岡山)

## 編集後記

市町村合併が収束に向い、道州制の議論が新聞紙上をにぎわせ始めました。都市計画は、地方分権推進の1つの象徴のような形で、多くの決定権限を市町村が持つようになりました。しかし、地方財政が大変厳しいためか、また、専門家の能力や人材不足のためか、都市計画が市民に身近なものとして、より有効に活用されているという実感がわいてきません。(そうではないという事例を是非ご紹介ください)

支部の都市計画研究会では、今年度景観をテーマとして検討を重ねてきました。まだまだ試行錯誤で、国、自治体、市民、事業者等のそれぞれの立場で、景観づくりにどう取り組むか、その際、景観法をどう使うかなど、個人的には分からないことだらけです。

今後の活動計画に紹介しました通り、今月29日、西村幸夫先生を迎えて景観フォーラムが開催されます。私の疑問に対して、大きな示唆を与えていただけるものと期待しています。私事ですが、西村先生とは、20数年前、お互いに学生のと看、歴史的町並みの調査にご一緒させていただいたことがあります。そのとき、地元の自治体(住民だったかもしれません)から「文化で飯が食えるか」という疑問が投げかけられました。その答えはまだ見つかっていません。見つかっていないどころか、「景観で飯が食えるか」という疑問にもぶつかっています。文化も景観も、観光で取り返せる(ペイできる)部分はわずかでしょう。

そして、最近「都市計画で飯が食えるか」という“現実”にぶつかっています。これは決して「業」としての都市計画のことだけではなく、市町村行政や市民が、都市計画に何を求めているのか、そして、都市計画という道具が、その期待にどうやって応えていくのか、あるいは、応えられるのか、その答えが求められていると思います。

1月から愚痴っぽいことを書いてしまいました。また、紙面の都合上、極めて言葉足らずになってしまいましたが、この一年、このような疑問に対して自問自答することになりそうです。

(佐伯達郎)

編集委員：佐伯達郎(編集長)、上之博文、佐藤俊雄、周藤浩司、隅田誠、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也